森コラム　19
時の流れ

理事長　森　勉

昭和は遠くなり、平成は終わり、令和の御代になって初めての新春を迎えた。年の変わり目の大晦日には煩悩に思いを馳せ除夜の鐘を聞きながら長寿を願い年越し蕎麦を頂く。元日には玄関に繁栄を願い門松を立て、床の間に三種の神器に見立てた鏡餅を飾り、縁起物のおせち料理を頂き、家族揃って神社・仏閣に初詣し年神様に過ぎし年を感謝し来たる年の幸多からんことを祈る。因みに、明治神宮、成田山新勝寺、川崎大師では各々３００万人を超える人々が参詣するそうである。元号が変わり世代が交代する中、年々歳々変わることのない微笑ましくも穏やかな年越しの歳時記である。

またわが国には、変化に富んだ美しい四季の変わり目がある。草花が芽吹き開花し実をつけ生き物が新たな命を誕生させる春、太陽の恵みを受け緑が濃くなり万物が勢いよく活動・成長する夏、稲や果物が実り山々が錦に彩られる豊穣の秋、大地は霜や雪に覆われ木々は葉を落とし多くの生き物が冬眠する冬、四季のうつろいは人々の生活に大きな変化と活力を与えてくれる。そして、夜が明けると「お早うございます」、太陽が昇ると「こんにちは」、日が暮れると「こんばんは」と日々の変わり目は日常の中で挨拶として習慣化している。

銀河の片隅太陽系で、地球が太陽の周りを約３６５日で公転し、地軸が公転面に対して23・5度傾き・日本列島が北半球の中緯度に横たわり、地球が24時間で自転している。このため、年が刻まれ流れ行き、春夏秋冬の四季がうつろい、昼夜が当たり前のように繰り返される。加えて月が地球の周りを約29・5日で公転し、地球を1周する間に1回自転しているため、お月様のうさぎが常に見え、周期的に美しい月の満ち欠け、潮の干満がある。

日本人は大自然が時を刻む奇跡のような営みに畏敬の念を感じる一方、鴨長明の『方丈記』では「ゆく河の流れは絶えずしてしかももとの水にあらず。よどみに浮かぶうたかたはかつ消えかつ結びて久しくとどまりたるためしなし。世の中にある人とすみかとまたかくのごとし」、松尾芭蕉の「奥の細道」では「月日は百代の過客にして行きかふ年もまた旅人なり。船の上に生涯を浮かべ馬の口とらえて老いを迎える者は日々旅にして旅をすみかとす。故人も多く旅に死せるあり」と時の流れに言いようのない無情を感じこれに身を任せようとした。これもまた大和心であり日本人の魂ではなかろうか。

謹賀新年

会　長　志摩　篤　陸57
相談役　冨澤　暉　陸60
（最下段は委員長等）
理事長　森　勉　陸70
副理事長　深山明敏　陸57
同　熊谷　猛　陸57
同　白石一郎　陸61
専務理事　奥村快也　陸70
理　事　鈴木芳雄　士60
同　原田太郎　士61
同　藤木俊一　熊47
同　黒川一夫　東48
同　日野潤一　広49
同　藤森　篤　陸60
同　吉橋　誠　陸65　慰霊援護
同　林　直人　陸71　財務
同　加賀谷貞司　陸72　近現代史
同　中村幹生　陸73　広報
同　廣瀬　誠　陸73　総務・教育
同　火箱芳文　陸74　安全保障
同　山崎美千代　陸74
同　柴田幹雄　陸75　編集
同　小山田隆　陸75　厚生
同　山越孝雄　陸75　事務局長
同　小渕信夫　陸78　入会促進
同　阿部軍喜　陸57
監　事　杉澤敬子　陸58
評議員　日高　誠　士58
同　半田精三　士59
同　森　繁弘　士60
同　西尾充之　士61　議長
同　小倉健男　士61
同　丸山　哲　大47　副議長
同　今村耕一　名47
同　三島正雄　熊48
同　桑　昌利　仙49
同　川口　渉　陸56
同　五十君弘太郎　陸58
同　上甲敏男　陸59
同　平野浹治　陸59
同　大浦誠哉　陸60
同　齊藤　信　陸61
同　阿部英輔　陸62
同　松村興延　陸64
同　嶋野隆夫　陸66
同　福井孝三　陸68
同　今野茂雄　陸69
同　靏田俊秀　陸69
同　柳澤壽昭　陸69
同　鈴木　健　陸71
同　鬼塚隆志　陸72
同　佐藤修一　陸75
同　山形克己　陸76
同　新村暢宏　陸77
同　中川義章　陸78
同　森山尚直　陸82